

12. 高次脳機能障害を持つ本人、家族が 安心して社会参加に取り組む事を支援

代表者 稲福 仁裕（沖縄県）

・活動の目的

沖縄県には「脳損傷友の会ゆい沖縄（以下、「ゆい沖縄」と略します）」という、家族に高次脳機能障害の当事者（以下、「本人」と略します）を持つ家族の会があります。平成17年10月に数名の家族が家族会の必要性に同調し会を発足。本人や家族の方からの相談や、リハビリテーション活動や交流、更に医療・保健・福祉等の関係機関や行政、地域住民等に対する普及・啓発活動等に取り組んでいます。正会員（本人や家族）だけでなく、賛助会員の登録者やボランティアで関わる方々も多く、職業・立場も様々です。

私は「作業療法士」であり、ゆい沖縄発足当時から賛助会員として会の活動に微力ながら携わっています。高次脳機能障害の支援に携わるきっかけになったの仕事（職業）を通してですが、家族会に関わるようになった目的は、当時は現在よりも本人や家族が社会に理解されておらず、制度や各方面からのサービス・支援が十分に受けられていないため、社会的孤立状態にあった状況を少しでも改善に導き、何よりも本人家族が安心して地域生活・社会参加が出来るための「お手伝い」をしたいと思ったことでした。

私と同じ資格を有する妻もこの考えに賛同し、平成19年5月よりゆい沖縄事務所内で本人らを対象にしたリハビリを目的とした活動（以下、「作業療法活動」と称します）に、指導・援助するボランティア指導員として携わっています。

以下に、助成金受贈後の平成20年11月以降から今日に至るまでの間に取り組んだ内容についてご報告致します。

・内 容

- 1) 毎週定期で実施する作業療法活動、及び地域内の協賛事業所における就労前訓練（就労体験実習等）における指導・助言・援助

毎週水・金曜日に、ゆい沖縄事務所（沖縄県宜野湾市に所在）においてリハビリテーション活動を実施していますが、妻は主に金曜日の「作業療法活動」を担当しています。活動前のミーティングで一日の予定や役割分担・参加者各々の目標を設定し活動を開始します。認知機能改善を意図した書字や計算問題、プログラム機材を使った課題解決訓練・パソコン操作訓練・クラフト作成などのアクティビティーの他、昼食担当係には買い物や調理の企画・実施等のスキル向上を目標とした調理実習・身体機能の改善向上とストレス解消を目指したスポーツレクリエーションプログラム、就労前訓練では体験実習を了承頂いている協賛事業所での就労体験実習やアロマ石けん製作及び精米機器を使った精米作業とその販売等にも取り組みます。

一日の活動が終了すると「本日の振り返り」を全員で実施し、本日のプログラムが終わります。



(アロマ石けん製作風景)



(「ゴーヤー石けん」の出来上がり)



(協賛事業所での就労体験実習へ)



(食事介助を実施中)

2) 「宮古地域の高次脳機能障害者相談事業(座談会)」への参加

ゆい沖縄の依頼による沖縄県宮古島市での相談事業に参加。ゆい沖縄で取り組まれているリハビリ活動について紹介し、関連の質問・意見交換や相談等に対応しました。



(医療機関や保健所・福祉関係者の他、当事者や家族も参加して取り組まれました)

3) 「ゆい沖縄講演会」における講演

高次脳機能障害を持つ女性当事者(ゆい沖縄の非会員)が、家族と共に地域での生活を可能とするためのコーディネーターとなり、役所や社会福祉協議会・医療や福祉の関係機関や事業所と協議・連携して支援していくための体制作りに取り組んだ事例を紹介しながら、高次脳機能障害に対する支のあり方を講演。普及啓発に一石を投じました。



(専門家による基調講演の後、附帯内容としての講演を実施しました)

4) 交流会等への参加

新春や今夏に開催された交流会に参加、新しく仲間入りした会員やオブザーブ参加した方々と楽しい一時を過ごしました。



(ボーリング大会の後、リゾートビーチに会場を移し、バーベキューやスイカ割りを実施)

5) 定期総会における活動報告、及びゆい沖縄に入会する家族他に対し実施した実態調査に関する研究の報告

5月30日、定期総会は正会員及び賛助会員、関係者等のオブザーブ参加者がいる中、開催されました。昨年度の事業報告・リハビリテーション活動に関連した報告等を行った後、本人や家族に実施した実態調査に関する研究結果について紹介・報告をしました。



家族8割がストレス

脳損傷友の会 介護者に県内初調査

高次脳機能障害者や、その家族らを中心に設立された脳損傷友の会「ゆい沖縄」(宮城末子会長)の総会と報告会が30日、宜野湾市社会福祉センターで開かれ、会員ら約50人が出席した。同会賛助会員で作業療法士の稲福仁裕氏は、同障害者を自宅で介護する家族の約8割がストレスを感じている実情を報告した。稲福氏によると同障害の介護者を対象にした調査は県内初めて。

稲福氏らの研究グループ「という障害者を介護する家族は県内で高次脳機能障害者を在宅介護する家族34人に面接調査を行った。その結果、介護のストレスを感じると答えた人は26人で76%に上った。同障害を特性別に6タイプに分類。「疲れやすい、意欲が低下する」稲福氏の報告に耳傾ける報告会の出席者30日、宜野湾市社会福祉センター

「という障害者を介護する家族は県内で高次脳機能障害者を在宅介護する家族34人に面接調査を行った。その結果、介護のストレスを感じると答えた人は26人で76%に上った。同障害を特性別に6タイプに分類。「疲れやすい、意欲が低下する」稲福氏の報告に耳傾ける報告会の出席者30日、宜野湾市社会福祉センター

稲福氏は「障害特性によって介護者の健康状態やストレスは異なる。特性を踏まえた上で支援する態勢づくりが課題だ」と話した。

(平成21年6月1日、琉球新報・朝刊社会面に掲載されました)

6) その他

．結 果

助成金については、「作業療法活動」を主に利用しました。活動材料・事務関連の購入の他、移動費等に当て、それ以外の活動では、交流会等に利用しました。特に「アロマ石けん」製作活動に必要な材料購入に大きな貢献がありました。製品の良さが認められ、売れ行きも徐々に向上しています。協賛事業所での体験実習では、本人に対する意識改革や考察・気づきの機会を提供し大変効果的であり、指導する側も本人達の再評価や情報収集・可能性を見極める事に繋がり、この実習体験の重要性を改めて知ることに至りました。普及啓発を目的とした種々の取り組みにも助成金は大いに役立ちました。

．総 括

現在はゆい沖縄に携わり始めた当初の頃より、高次脳機能障害に対する社会的認知度は向上し制度やサービスのあり方についても格段に整備され、サービスする側にも少しずつですが意識改革の兆しが見受けられるようになり、結果として以前に比べ本人・家族が安心して社会参加が出来る様になったと考えます。しかし、未だ課題が山積している事も事実です。

「見えない、又は見えにくい障害である」や、「多種・多様に障害像が存在する」等の高次脳機能障害の特徴を踏まえた支援には、他の障害に類を見ない困難を伴う事、及び時間と根気強さ等の労力を要する事等をこのボランティア活動を通して知りました。しかし、「私たちが社会人としての立場を持ちながらでも、出来る範囲で彼らの役に立つ事がきっとある。そして、彼ら自身が変わろうと意識している限り、可能性は実現に向かうはず」という考えも同時に持つ様になりました。私はこの事を忘れずに、今後も継続してボランティア活動に取り組んで行きたいと考えています。

．謝 辞

今回、助成金を受贈出来た理由として、私共のボランティア活動が社会的に有意義であり、必要性があると評価された背景があったからだと考えております。又、社会人としてこのような取り組みが出来るのは、家族や職場・ゆい沖縄の役員・会員や賛助会員・事業に対して御協力頂ける事業所関係者皆様等々の理解や励まし・我々を必要としている思いが在るからこそとも考えています。皆様に対しこの場を借りて、厚く御礼申し上げます。更に、財団法人大同生命厚生事業団の五十嵐理事長並びに関係者の皆様に対しても、衷心より御礼申し上げます。

．決算報告

収 入	大同生命厚生事業団助成金	¥ 200,000
支 出	作業療法活動関連費 (材料購入、その他の雑貨、移動 等)	¥ 93,710
	交流他関連(移動、飲食提供 他)	¥ 11,9425
合 計		¥ 213,135